

僕らは海に捨てに行つた

蜜蜂いづる



もしも運命というものがあるとしたら、夏のあの日に目覚まし時計のアラームをセットし忘れていつもより十五分遅く起きてしまったという出来事がまさにそれに当たるのかも知れない、と今になって思うことがある。

髪を整える余裕は無かった。朝食を取るなんてことは考えられなかった。とりあえずパジャマを脱いでシャツを着て、その上にカッターシャツを羽織る。鞆の中身はいつもと代わらない教科書とノート、そして筆箱やら下敷きやらだ。リュックサックを背負う。中に入っているのは英和辞典と様々な小説。とりあえずそれらを掴んで、僕は自転車に乗った。

間に合って欲しい、と思っていた。高校に入ったばかりの僕は早くも授業の内容に追いつけなくなっていた。だから夏休みの時期であるとしても、この期間に学校で行われる補習には参加しておきたかった。成績が下がってこれまでみたいに悠長に本を読んだり友達と遊んだりすることが出来なくなるのは分かっていたから。

そうして必死に自転車のペダルを漕いでバスの待合所まで行った時に僕が目にしたものは、これに乗れば一時間目の前に行われるホームルームには食い込んでしまうけれど、それでも辛うじて一時間目には間に合う時刻に着いてくれるはずのバス

だった。待合所の片隅に設けられている自転車の駐輪場に停めようとして、あまりにも慌てていたので自分の自転車を派手な音を立てて倒してしまい、同じく補習に参加する生徒たちの自転車までドミノのようになぎ倒してしまった。

僕は息を切らせて、倒れてしまった三十台ほどの自転車を見た。遅刻は確定だ。だったらしょうがない。この自転車を何とかしないといけない。僕はまず自分の自転車を起こして、そして隣の自転車に手を伸ばした。朝だというのに僕は汗だくになっていた。ハンカチを取り出して額と首筋の汗を拭う。それでも汗でまとわりつくカッターシャツが気持ち悪かった。溜め息をつく。

すると後ろから同じように自転車のペダルを漕ぐ音がした。振り返ると、そこには早紀先輩がいた。

「おはよう」

先輩はそう言って駐輪場の様子を見た。「大惨事ね」

「おはようございます」と僕は返した。「遅刻してしまいました」

「まあ、まずはこの自転車を何とかしないとね」

早紀先輩はそう言って僕の傍まで来ると、倒してしまつた自転車を少しずつ起こし始めた。

僕は言った。「いいですよ、僕、自分でやります」

「気を遣ってくれなくてもいいよ？」

「いや、気を遣うとかじゃなくて、倒したのは僕だから」



そう言うくと早紀先輩はふふつ、と声を出して笑った。そして言った。

「富沢君、相変わらず面白いね」

「いや、そういうつもりじゃないんですけど……」

「先輩が倒した自転車を見捨てて去っていく先輩なんていないよ」

僕と早紀先輩は倒れた自転車を一台一台起こしていった。起こしながらちらつと先輩の姿を見る。先輩の髪の毛は僕のような癖のある黒くて強い髪の毛ではなく、いわゆる猫つ毛の類に入るのだろう、とてもさらさらとしている。やや赤いその髪の毛をツインテールにしている、だから形のいい耳や首筋が露になっている。

制服姿の先輩がスカートが広がらないようにしてしゃがみ込みながら自転車を起こしていくその光景は、それだけで何だか映画のワンシーンのようにも見えた。当時僕は小説を書いていたので、このシーンは小説で使えるかもしれないと思った。後でメモ帳に記入しておこう、と。でも、まずは自転車を起こすことだ。僕は力を入れた。

やがて無残に倒れた自転車たちは元通りになった。早紀先輩は笑顔で言った。

「良かったね」

「ありがとうございます」と僕は言った。そこでふと気になったことを訊いてみた。

「今日は伊達先輩とは一緒じゃないんですか？」

いつもだったら二年生の早紀先輩は、同じクラスでみんなも既に先輩の彼氏だと知っている伊達さんと一緒にいるのが普通だった。バスの中でも、放課後に帰宅する時も。昼休みも早紀先輩は伊達さんと一緒にお弁当を食べたり、学食でも向かい合わせに座って何か会話を交わしながらお互い仲むつまじく笑いあったりしているのが普通だった。もしくは伊達さんがグラウンドで野球部の練習に励んでいる時であつても、早紀先輩はフェンス越しに（もしくは正式には野球部には加入していないけれど、マネージャー的な役割を果たすためにグラウンドの中にいて）先輩を見ているのが普通だったからだ。

独りぼっちの先輩の姿は、そういう事実を振り返ってみると何だか妙な気がした。

早紀先輩は言った。

「伊達ちゃん？ あいつだったら野球部の朝練があるからみんなより早めにバスに乗ってるはずだよ。来年は俺がキャプテンになって甲子園だ、って張り切ってるから」

「そうなんですか……」

じゃどうして早紀先輩は付き添わなかったのかという疑問も湧いてきたけれど、それ以上詮索することには意味がないような気がして、そこで言葉を止めた。

待合所から五分ほど歩いた場所にローソンがあつて、僕はそこでメロンパンと缶コーヒーを買つて歸つてきた。次のバスにはそれでもあと十分はかかる。完全に遅刻のフラグが立つてしまった。

「朝ごはん食べ忘れてきたんです」と僕が言うと、先輩は言った。

「朝ごはんは大事だよ。食べないと身体に悪いし」

「先輩は朝ごはんちゃんと食べるんですか？」

「お相撲さんつて、知ってる？ 朝ごはん食べないんだよ。胃袋を空っぽにしてお稽古して、お昼ごはんを食べて体を太らせるの。子供の頃その話聞いてから、怖くなつて朝ごはんだけは食べるようにしてる」

「じゃ、今日も朝ごはんは……」

「もちろん食べてきたよ」

僕は早紀先輩がこの待合所に来た時のことを思い返してみた。破れそうなくらい心臓が鼓動を打つて汗だくになっている僕とは違つて、先輩の姿は平然としていた。ということは、急いでいなかったということになる。

「次のバスに乗ると遅刻確定ですね」と僕は言った。

「そうだね。でも学校には行けるよ」と先輩は返した。

「どうしようかな。僕、今日の補習だけは受けたかったんだけど……」

「受ければいいじゃん」

「いやでも、遅刻しちゃうから……」

そう言うと、早紀先輩はまたふふつと笑つて言った。

「富沢君つて皆勤賞でも目指してるの？ あ、でも遅刻だともう貰えないか」

「そうじゃないですけど、遅刻するんだつたら行く意味がないかなつて」

「富沢君つて本当に面白いね。白と黒しか選択肢を考えられないつていうか」

そうなんだろうか？

「わたし、一学期だけで五回ぐらい授業サボつてるよ。遅刻してまで行くのもかつたるいし、今日はこのまま休んでどつか遊びに行くかなつて。親には怒られるけどね」

「まあ、うちの高校はわりと校則が緩いから……」

そう言つて僕はメロンパンを一口齧つた。

運命の瞬間はその時に訪れた。

「ねえ。今日、学校サボらない？」

早紀先輩のその言葉の意味を理解するまで、少し時間がかった。

「サボるんですか？」

「どうせ今から行つても遅刻でしょ？ だったら行く意味ないじゃない。今日、二人で一緒に学校サボつて海にでも行かない？」



もちろん補習のことも考えた。遅刻はしても補習を受けることは出来るし、クラスメイトにノートを借りれば出られなかった授業の内容を取り戻すことも出来るだろう。しかし、もっと肝心な問題がある。僕はそれを口にした。

「いいんですか？ 伊達先輩、怒ると思いますよ」

「どうして？」

「どうしてって……」

僕は早紀先輩と伊達先輩が一緒にいる光景を想像してみた。二人が生み出す親密な空気の中に、例えば僕のような人間が入り込む余地なんてどこにもない。先輩たちの世界はそれだけ強固だということだ。だから目の前にたとえ早紀先輩しかいないにしても、その先輩の傍には実際には遠く離れた伊達先輩がいる。そう感じていた。

外からエンジン音が聞こえてきた。学校に行くバスが到着したということだ。

僕が乗ろうと席を立つと、早紀先輩は言った。

「その格好のままで遊びに行くの？」

「いや、まだ遊びに行くって決まったわけじゃ……」

「先輩の命令を無視するの？」

僕は驚いてしまった。「命令なんですか？」

すると、芝居がかって険しい顔つきをしていた早紀先輩はまたふふっと笑って言った。

「冗談よ。富沢君が付き合ってくれないんだったら、今から私服に着替えて一人で姫路にでも遊びに行くから」

迷ってしまった。このバスに乗れば辛うじて補習の二時間目ぐらいには間に合うかもしれない。渋滞か何かで間に合わなかったとしても三時間目には出られるし、友達にノートを借りることも出来る。だったら乗ってもいいはずだ。目の前の早紀先輩にとつても、もしくは伊達先輩にとつてもそれが一番いいはずだった。

だったら、何を迷っているんだろう？

でも、それについて結論を出す前に、僕の口は思ってもみない言葉を語っていた。

「分かりました。今から着替えてきます」

「ホントに？」

「先輩の頼みを断ることは出来ません」と僕は言った。

おいおい、何を言ってるんだ？ 補習に出ないと他の生徒たち

ちに確実に置いてけぼりにされるっていうのに……。でも、僕はそう言うのと駐輪場まで行って自分の自転車を探した。すると早紀先輩も駐輪場まで来て、そして言った。

「じゃ、わたしも着替えてくる。ちよっと時間かかるかもしれないけど待っててね」

日が少し昇るだけで、肌に当たる日光の力が強まってくることに否応なしに気付かされる。父は仕事だから見つかるかどうかなんて考える必要はない。問題は母の方だった。息子が学校をサボって私服で遊び呆けているということを知ったら、あまりいい顔はしないだろう、と思ったから。でも、母の姿はどこにもなかった。多分買い物か、近所の寄り合いにでも出かけているのだろう。

僕は私服を探した。普段だったら適当に選んで着るのだけれど、早紀先輩はいつもそんなに飾り気のない、それでいて自分の雰囲気にしっくり合うような服を着る。だからそんな早紀先輩に見合うような服を着た方がいいような気がしたのだ。もともと、ただ遊びに行くだけだから……でもその遊びの内容って何なんだろう？ 普通の遊びなんだろうか、それとも……。

あまり深く考えないようにした。何だか成り行きに任せておいた方がいいような気がしたのだ。僕は迷った挙句、無難に白い開襟シャツとベージュのチノパンを着ることにした。どっちも母親がわざわざ私服にと買って来たもので、特に開襟シャツのほうはなんだか自分のイメージには似合わない小洒落た感じがしてあまり普段は着る気もなかったのだけど、逆に言うところこういう機会だから一応袖は通しておこうかなと思って選んだのだ。

重いカバンとリュックサック、そして脱いだ制服をベッドの下に隠す。勝手に部屋に入られた時に見つかつたらまずいと思つたからだ。まあ、どうせ帰宅時間もいつもより遅れるだろうし帰つた時点で両親は既に家にいるだろうから意味がないといえはないのだけど、どうせなら見つかるまでの猶予を伸ばしておきたかった。その方が親バレを気にしないで思いっきり遊べそうな、そんな気がした。

尻のポケットに財布を差し込む。そして部屋の片隅に置いていたバッグの中にリュックサックに入れていた小説とCDウォークマンを入れて、外に改めて出る。制服を脱ぎ捨てて手ぶらで表に出ただけで気分がこんなに変わるものだとは思わなかった。いつもだったら鬱陶しいと思うだろう蝉の啼く声も、むしろ先輩と遊びに行くためのムードを盛り上げてくれる、大袈裟に言えば祝福のようにさえ聴こえてくる。そう思つてしまふということはやっぱり早紀先輩と遊びに行くことを楽しみに思っている自分がいるという証拠であつて、伊達先輩のことはあまり考えないようにした。二人でいるのが見つかったら色々ややこしいことになるだろうけれど、流石に早紀先輩が僕に浮気しているとまで考えたりはしないだろう、と。

つまり早紀先輩のような人が、伊達さんを捨ててまで選ばよ  
うな男では僕はない、と。



先に待合所に着いたのは僕の方だった。待合所には誰もいない。普段だったら休日であっても何人かの大人の人がいて、僕と同じようにバスを待つのが普通だった。そう考えると何だか自分たちが異世界の中に入ってしまったような気がした。ともあれ、先輩は必ず来るだろう。それに備えて、MDウォークマンを取り出した。MDを再生させる。近所のレンタルCD店で借りた平沢進の『Sim City』だ。

聴きながら、さつき駐輪場で見た光景のことを思い出した。小説を書くための舞台を想像してみた。舞台は東南アジアのどこかだ。自分は、その地に降り立った異邦人。行ったことはおろか見たことも殆どないようなそんな国々のことを思い描いてみる。

路面は舗装されているのだろうか。多分路地に入り込むところには茶色い土を剥き出しにした光景が広がっているに違いない。木を乱暴に組み立てて作った家屋からは例えば住民たちの飼っている犬や猫、ニワトリや豚といった動物たちが姿を現し、あるいは啼き声を上げる。騒がしいといえは騒がしい、しかしそれは日本の日常生活に満ち溢れた、例えば街頭でしょっちゅう聞こえてくる何かの不愉快なアナウンスといったものではなく、風景に溶け込んであまり神経に障らない類のものだ。

そこを舞台にして小説を書くことを考える。音楽はそうした

風景により臨場感をもたらしてくれるような気がして、ずっとそれに耳を傾けてしまう。道に迷った主人公は正午過ぎ、照り付ける日光の中時折吹いてくる微風を感じながらハンカチを取り出し、額や首筋の汗を拭き取る。すると、そこに一人の少女が座り込んでいる。少女の前にあるのは、例えば水道の蛇口とそこから流れてくる、しかし決して煮沸せずに飲んではいけない水。そしてそれを受ける洗面器のようなもの――。

そこで肩を軽く叩かれて、僕は顔を起こしてイヤホンを耳から外した。

「お待たせ」

そこに立っていた早紀先輩の姿を見て僕は息を呑んだ。

先輩はその赤い髪の毛の色だとか、伊達先輩や男女を問わず友達と楽しそうに喋っている雰囲気からしてちよつと自分とは違う、遊んでる、という印象を抱いていた。だからもつと派手な服装で来るのではないかと思っていたのだけど、着ている物は意外とシンプルだった。水色の地に、僕から見て右から中央に線を描いて流れる青色の川とそこを泳ぐ鮮やかな赤い金魚をあしらったTシャツ。そしてデニム地の短パン。たつたそれだけの服装なのに、そんな姿の先輩と一緒にいるのは慣れてなかったというか初めてだったので、自分の服装が場違いじゃないかと考えてしまった。

「富沢君の私服って初めて見た」と早紀先輩は言った。

「ああ、これ、買ってもらった服なんです」と僕は言った。「何だか先輩の服装と釣り合っていないっぽいですね」

「そうかな。富沢君らしくいいと思うよ」

「僕らしくって？」

「いつも寡黙っていうか、真面目そうな富沢君らしいっていうか」

そう思われているんだろうか。そんなに喋らないタイプだと自分のことを思ったことはないけれど……と考えていたら、またエンジン音が聞こえてきた。先輩は歩き始め、ふと僕の方を見て言った。

「運賃、だったら気にしなくていいよ。お金、結構持って来たから」

「いいんですか？」

「誘ったのはわたしだから」そう言っただけで歩き出す。僕もそれについていく形になった。

バスの乗客は僕らしかいない。僕らはバスの一番最後の席に座った。

「一回でいいからここに座ってみたかったんだよね」と先輩は言った。「一番最後の席からみんなを見るのって楽しそうだな、って」

でも僕はやはりそれどころではないものを感じていた。伊達先輩のこと……それを言い出そうとした時、ふとある匂いが鼻をついた。ミントの匂いだ。

「ミントの匂いがしますね」と僕は言った。その匂いは先輩の方から漂ってくる。「香水ですか？」

「違うよ」と早紀先輩は言った。「制汗剤の匂い」

「性感帯？」

「……グーで殴っていい？」

「いや、そんなつもりはなかったです。すみません」

早紀先輩はやっぱ顔を綻ばせて言った。「富沢君も意外と普通に冗談言うんだね」

先輩の中で僕がどういう位置づけなのか、それを聞いてまた考え込んでしまったのだけど、肝腎なことを問おうとしていたことを思い出して僕は言った。

バスは走り出した。

再後部の座席に僕と先輩は二人、隣り合って座っている。少なくとも制汗剤の匂いは感じられるように。だとすると……。

「いいんですか？」と僕は訊いた。

「何が？」

「伊達先輩のことです」

「伊達ちゃん？ それがどうしたの？」

「いや、伊達先輩が知ったら怒るんじゃないかって。こうやって僕らが二人だけでくっついて座ったりしてるのを見たら」

「なんで伊達ちゃんが怒るの？」

「なんでって……」



僕はバカにされているんだろうか？ 何かを試されているんだろうか？

「伊達先輩と早紀先輩は、恋人同士ですよね？」

喋っているとは何かあまりにも当たり前のことを確認しているようで、自分が何を言っているのかさえも分からなくなってくる。変な世界に迷い込んだみたいで気分が。でも、とにかく僕は続けた。

「早紀先輩には恋人がいるのに、伊達先輩の知らないところでこうやって二人きりしていると、その、誤解されてもおかしくないと思うんです」

「誤解って？」

どう言葉を選べばいいのか分からない。

先輩の向こうにある窓から、自分たちの乗っているバスが待合所を離れて本当に二人だけで遊びにいくために移動していることが窺えた。普段流れる景色は見慣れていて平凡に見えるのだけれど、こういう時は何だか自分たちがもう二度とここに戻って来れないんじゃないか、という気がしてくる。空想の風景で描いたのとは似ても似つかない、しかし太陽は確実に天高く上っている状況で舗装されたアスファルトの上を、街路樹越しにコンビ二や銀行といった建物の立ち並んだ中を、バスは走っていく。

「その、早紀先輩と僕が恋人になったっていうか、こうやって

私服で二人で遊んでいるところを誰かに見られたら、先輩は浮気してるとか思われるんじゃないかな、って」

「富沢君ってほんとに白と黒しか考えられないんだね」と早紀先輩は言った。「恋人はいても異性の友達と一緒に遊びに行くことって、そんなに珍しくないでしょ？ 伊達ちゃんだって親しい女友達とかいたりするんだよ？」

「でも……」

「だから、考え過ぎだって」

先輩にそう言われるとは何か誘惑されているような気分になった。いや、本当に誘惑しようとしてるんだろうか？

「でもですね、伊達先輩は硬派な人です。中学の時に僕が野球部にいた時も面倒見てもらってたし。色々お世話になったし……だから、先輩を裏切るようなことは、したくないんです」  
逡巡を断ち切るように言おうとしたら言葉尻が強くなってしまう。

その言葉を聞いて早紀先輩は少し黙っていた。そして僕から視線を逸らし宙を見上げる。

「硬派、ね」

先輩の中で何か複雑な考えが生じていることは分かった。だから僕はそれ以上は言わなかった。やはり伊達先輩を裏切ることは許せない、そう自分に言い聞かせながら。

すると先輩は、間をおいてぼつんと言った。

「あいつ、硬派なんかじゃないよ」

僕は言った。「何か、あつたんですか？」

すると早紀先輩は、答えた。

「ちつとも硬派なんかじゃないよ。あいつ、他に女作つてたの」

僕は驚いてしまった。「マジですか!？」

「そう」

それ以上事情を詮索した方がいいのかどうか戸惑っていると、先輩は呟いた。

「二週間前の日曜日んだけど、わたし、伊達ちゃんのところ  
にちよつと遊びに行つたの。珍しく伊達ちゃんは部活が休みの  
日だから、あいついるかな、つて思つて。その時携帯を家に忘  
れちゃつて、でもまあ驚かせてやろうと思つて連絡しないで  
行つたんだ。あいつ、家に鍵かけてなかったからそつと入つて  
みたら……」

「誰か女の子がいたんですか」

「いた。しかも、キスとかしてて」

「ほんとですか？」

それは本当に衝撃の告白だった。

仲良しな伊達先輩と早紀先輩の姿、早紀先輩の前で破願する  
伊達先輩の姿を見ていたら、先輩がまさか早紀先輩を裏切るよ

うなことをするとはとても思えなかつたのだ。

「もう頭の中、とんじやつて。時間が止まつたかと思つた。で  
もなんかね、不思議と怒る気持ちとか悲しい気持ちとか湧いて  
こなくつて、ああ、わたし、伊達ちゃんに選んでもらえなかつ  
たんだな、つて思つて」

「結局、別れたんですか」

「あいつが硬派だつていうんだとしたら、変な言い訳をしな  
かつたことぐらひは認めてやるかな」と早紀先輩は言った。  
「ブックオフの前のファミレスあるでしょ？ あそこで夜中の  
一時ぐらひまで、色々事情を説明してもらつて、伊達ちゃんに  
正式に『今まで本当に申し訳なかつた、でも俺はお前よりあい  
つこのの方が好きなんだ』つて言われて。そう言われると、  
もうどうしようもないよね？ だから、伊達ちゃんは奢るつて  
言ってくれたんだけど割り勘で払つてとつと帰つたの。今か  
ら考えたら、水でもぶっかけてやれば良かったのかな」

そうだったんですか、と僕は呟いた。

そういうことが起こつていゝとは思つてもみなかつた。

ちよつと夏休みに入る時期で、先輩たちと顔を会わせる機会  
もなかつたしその手の噂にあまり普段興味を持っていないこと  
もあつて、僕は何も知らないままいたわけだ。

先輩は言った。

「そういうわけで、あいつから貰つたプレゼントとかほとんど



全部友達にあげたり、後はオクで売ったの」

「億で売ったんですか？」

「そんなに高いプレゼントはくれなかったけどね」と先輩は笑った。「でも、それで少しお金が出来たから、だから今日はバス代も食事代も全部わたしが奢るから」

「いいんですか？ 伊達先輩のこと」

先輩の顔が険しくなった。「顔も見たくないよ、あんな奴」

そこで、少し疑問に思ったことがあった。それは今朝先輩と顔を会わせた時のことだ。何かそこに、言い知れない違和感を感じた。矛盾した何かを感じる、というような。

それが何だったか分かるのはもう少し後になってからのことだ。

「それはそうと富沢君」と早紀先輩が言った。「さつき何聴いてたの？」

「ああ、これです」

僕はそう言って鞆の中からMDウォークマンを取り出す。先輩が言った。

「Podとか持ってないんだ？」

「お金ないから。これ兄貴のお下がりでなんです」

「なんだったらわたし、買ってあげようか？」

「はい？」

「Pod」

「本当に一杯お金持つてるんですね」

僕がそう言うのと先輩は笑った。もちろんそれが冗談であることぐらいは僕にも分かった。

「先輩、平沢進って知ってます？」

「知らない」

「えっと、映画で『千年女優』とか『パブリカ』とかの音楽を手掛けた人なんですけど。見たことありますか？」

「ごめん、あんまり映画見ないから。有名な人なんだ？」

「まあ、マニアックな人なんですけど」と僕は言った。「東南アジアを舞台にした音楽を作ってる人で、TSUTAYAに行ったら置いてあったんで借りたんです。今気に入ってる」

「富沢君って結構音楽詳しいんだね。そう言えば伊達ちゃんも言ってた。中学の時は部活は強制入部だったから野球部に入ってたけど、高校は帰宅部もありになったから野球じゃなくて自分のしたいことを一人でやりたいって……」

「はい、そう言ったら伊達さんも『じゃ、頑張れよ』って言うてくれて」

「あいつはそういうところ強制しないからね。着いてきたければ着いてくればいいけど、嫌だったらしょうがないって」

「ええ」

伊達先輩が話に絡んでくると、早紀先輩はあまりいい思いをしないだろう。だから、実際に音楽を聴いてもらうために僕はイヤホンを片方渡した。先輩がそれを耳に挿し込む。

『Sim City』を流す。

音楽を聴いている間、人は無口になる。だから僕と早紀先輩も黙って音を傾けた。早紀先輩は目を閉じていて、僕はそんな早紀先輩の姿を見ていた。首筋に生えている産毛や、水色のTシャツに包まれた肩のラインといったもの。下世話な話になるけれど、伊達先輩も早紀先輩とキスしたりしたんだろうか、とかそういうことを考えた。僕には与り知らない二人だけの記憶や思い出といったものがあつて、それを先輩は全部売り払ってしまったんじゃないだろうか、と。

ふと見ると、先輩は右手に指輪を嵌めていた。目を閉じているので僕の方を見ることはない。指輪は銀色のもので、表面は艶やかで模様は一切入っていない。

この指輪もきつと伊達先輩から貰ったものなんだろう。

考えてみれば、僕は女性に何か大きなプレゼントをしたとかいう経験はなかった。せいぜいバレンタインデーに貰ったチョコレートのお返しで缶入りのクッキーを買って渡したとか、その程度のことしかしていなかった。恋人がいたという経験もない。将来こんな風に誰かに指輪を渡す日が来るんだろうか、と考えてみたけれどそれはずっと遠くで起こる別の世界の出来事

のように感じられた。

僕は目を閉じた。夢想の世界の方がやはり居心地がいい。

夜の世界を想像してみる。日本の東京のような都会では照り付ける陽光の熱をアスファルトが保存してしまうだけで、ヒートアイランド現象が起こってしまうのだけど、先ほどまで描いていた世界では舗装された地域はメインストリームだけで一歩路地を外れるとそこはむき出しになった土で覆われた世界だ。どこから漏れ出てくる汚水がその土に混じって泥濘を作っている。自動販売機が街灯と相俟って夜でも明るい日本の路地とは違って、建物が規則的に作られているわけではないのでどこどころ細くなったり広くなったりする隙間を注意しながら、身をぶつけないようにその路地へと入っていく。

空を見上げるとそこには月が浮かんでいる。気のせいかもしれない。日本で見える月よりもずっと近くにあるように感じられる。この月と何かのイベントを絡めるのも面白いかもしれない。そこに先輩をモデルにしたあの少女を登場させる。あの少女はこの集落で夏季の満月の時期に、年に一度行われる祭における特殊な舞踊を舞う演者として選ばれている。少女は月の中で、薄手の白装束を纏って演舞を舞う。特別に作られた鏡の表面のように滑らかな芝生の上で、月から目を逸らすことなく回り続ける。まるで芝生の上を滑るように。それに呼応して周囲の木々の間に生息している野生の動物たちが唸り声を上げ、それが更に演



舞を盛り上げる。彼女の力を必要としている組織と主人公の対決。そして、主人公と少女の間の諍い。少女はずっと演舞を見守っていた僕に向かって話しかける――。

ふと目を開ける。

バスはいつも僕たちが登校する時に降りるバス停に差し掛かるうとしていた。普段姫路に行く時も、このバス停を降りた地点から近くにある鉄道の駅に向かって行くことになるのでここから先の地点は僕が今まで降りたこともない場所になる。先輩の様子を見る。まだ目を閉じて音楽に聞き入っている。それとも眠っているのだろうか。とても静かだ。

本来ならここで降りるはずの場所。多分今ではみんな補習の授業を受けているのだろう。運動部の人間は午後からの練習も待っているはずで、相応にハードなスケジュールだと思つてそれをこなしている先輩のことを改めて凄いと思う。

「ここで降りないんですか？」

ふと、そんな言葉を発してしまった。早紀先輩が目を開ける。「目的地はもう少し向こうの方なんですけど」

「そうなんですか……」そう言えば目的地を聞いていなかった。

「降りたい？」

そう訊かれて、言葉に詰まってしまう。

「今だったらみんなと合流出来ると思うけど」

「いや、無理です。だって私服姿だし」

そう答えてはみたものの、補習を受けているみんなとは別行動を取っていることにはどこか不安が付き纏う。でも、今自分の身に起こっている出来事の方が大事なんだと思つた。

「これ、面白いね」

その言葉に我に返つて、先輩の方を見る。

「あんまり音楽のことつてよく分からないんだけど、この人の音楽、なんか結構面白い。感動しちゃつた」

本当にずつと音楽に聴き入っていたらしい。僕は言う。

「もしも良かったら、持つてるアルバム貸しますよ」

「本当？　じゃまた今度会つた時に貸してくれる？」

「いいですよ」

冷房の効いたバスの中からであっても、既に日は高く昇つていることが分かる。さつきまで思っていた世界とはかけ離れた、底が見えるぐらいに浅く流れる川、空き缶や紙コップなんかがところどころに引つかかっている川岸の雑草、そしてバスの右側をすれ違う対向車といった日常的な風景がそこには広がっている。いつもだつたら有り触れた風景として気にもしないそういう様々なものが妙に気になるのはきつと、早紀先輩が隣にいるからなんだろうな、と思う。

そして、やつぱり着いてきたのは正解だつたのかもしれない、と思つた。

その時はそう思った。

そして、今でも正解だったんじゃないか、とは思っている。

あんな出来事が起きたにせよ。

「それはそうと、一体どこに遊びに行くんですか？」

そう尋ねると、先輩は言った。

「海」

僕らはそのバスの最後のバス停で降りた。姫路の中心街からはちよつと離れた、ごくごく地味な住宅街だ。確かに海に近いといえば近い場所だった。

それまで姫路といえばみゆき通りだとか姫路城に連なる中心街で本や〇〇を買ったり、ネットカフェや古本屋で時間を潰したりとかそういう過ごし方しかしていなかったたので、そういう商店街からわずか外れた姫路の姿を見るのは実は初めてだった。自分が空想で思い描いているのと似ている、例えば舗装された道路は二車線で表面が塗り直されてうねっているアスファルトに僅かにひびが入っていたり、そこを外れた場所に今では懐かしい例えばボンカレの看板があったり、ふと家々の隙間に目をやるとそこどこかのお店の電話番号がこれもまた看板に大きく書かれていたり、縞模様柄の毛を纏った猫が座っていて生々しい生活感に満ちていた。

こういう風景もメモしておかないといけないな、と思った。

この町の生活感を、自分が思い描いていた夢想の風景とオーバーラップさせる。舞台は出来上がる。あとはプロットだけだ。

「お腹空いてない？」と早紀先輩は言った。

僕は言った。「そういえば、もうお昼ですな」

「お昼奢るけど、パスタって好き？」

「大好きです」

先輩はふふつと笑って言った。

「良かった。この近くに、美味しいお店があるんだけど一緒に行かない？」

「行きます」

「じゃ、ついてきて」

先輩はそう言うのと歩き始める。僕がそれを追う形になった。足取りには全然迷いが無い。もちろんこのあたりには先輩は何度も来たことがあるのだろう。道路を歩きながら、先輩の頭の脇で揺れているツイントールを眺める。こうやって歩いていると、本当にどこか謎めいたところに案内されているような気がする。この感情をきちんと覚えておこう。僕はそう思っていた。

十分ほどそうして歩いて着いたのが、その美味しいパスタの店だった。外装はそれほど目立たない、屋根は緑色に塗られていて白塗りの壁と「田」の字の窓枠にはめ込まれたガラスが透



き通つて見える、そんな店だった。玄関には一メートル四方の黒板が置かれていて、そこに手書きでお薦めのメニューが記されている。僕が知っているパスタの店は大体フォークがスパゲッティを巻き取ったまま空中で浮いているという、そんな見本に代表される店だったので改めて奢ってもらってもいいものだろうかと考えてしまった。一応僕も、それなりにお金は持つてきていた。

先輩が続いて中に入る。店内はそれほど広くなかった。入り口脇に階段がある。二階にも席はあるのだろう。一階にはカウンター席と、二人ずつ両側に座れる席が五つ。客が何人か既に入っていたけれど僕らの座れる席はあった。入り口に背を向ける形で僕が座り、その向こう側に早紀先輩が座った。木目が鮮やかな天板のテーブルに座って、僕は普通のミートソース・スパゲッティを頼んだ。先輩はボンゴレ・スパゲッティだ。

天井を見ると三つの羽を持つシーリングファンが優雅に回って店内の空気を循環させていた。こういう雰囲気も自分にとつては慣れないものだった。

僕は訊いた。「よく来るんですか？ このお店」

「時々伊達ちゃんと二人で来てたの」と早紀先輩は言った。「もともと伊達ちゃんの紹介なんだけどね。この辺にうちの学校とよく交流試合をする学校があって、その学校の野球部の友達に教えてもらったらしくて。伊達ちゃんもパスタは好きだから、

ここで食べて以来二人でよくちよく食べに来るようになったの。ここから姫路までそんなに離れてないから、映画とか観た帰りなんかに寄ったりして」

僕は伊達先輩が早紀先輩とこのレストランで昼食を食べている光景を想像してみた。今日だけで随分二人の知らない部分を知ったような気がした。目の前の早紀先輩は机に肘をついて、ぼんやりと外を眺めている。指先に光る指輪を改めて見た。

「その指輪も伊達先輩に貰ったんですか？」と僕は言った。

「ああ、これ？」と早紀先輩は言った。「そう。これも伊達ちゃんから貰った。でも、今日で捨てるつもり」

僕は驚いた。「捨てるんですか？」

「ていうか、今日はこれを捨てに来たの。もうちよつと歩いたら……」

そこで二階から男たちが降りてきた。

早紀先輩の表情が変わる。「大村君じゃん！」

「早紀ちゃん？ こっち来てたんだ」

階段の方を見る。背の高い二人組の男がこちらを見ていた。一人が無地の黄色いTシャツ姿で、髪型は軽い天然パーマ。後から入ってきたもう一人は青く線が縦に等間隔に入ったシャツを着ている。わずかに赤く染まった短髪だ。

「藤田君も一緒なんだ。どうしたの？」

「いや、今日神戸でオフ会があるのよ」と片方が言った。短髪の、藤田という男の方だ。「十代限定だからアルコール無しなだけで」

早紀先輩が返す。「絶対飲んじゃダメだよ。監督に怒られるからね」

大村という男の方が言った。「飲まない飲まない。不祥事起こしたら推薦取り消しだし、後輩に迷惑かけるわけにもいからいから」

「よろしい」

そう言つて早紀先輩は微笑んだ。

藤田という男の方が言う。「そう言えば、知ってる？ 早紀ちゃん」

「何？」

「伊達ね。あいつ、ふられたんだよ」

「マジですか!？」

そう言つてしまったのは僕だった。相手の二人が驚いて僕の方を見る。

「あ、この子ね伊達君の後輩の富沢君。野球部員じゃないけど」大村が言う。「何？ 新しい彼氏？」

早紀先輩が返す。「そうそう」

「いえ、全然違います」

「富沢君って年下ですごく礼儀正しくてお洒落なんだよ。伊達ちゃんとは大違い」

藤田が言う。「マジかよ。伊達が聞いたら泣くぞ」

大村が言う。「あいつ、やり直したいんだけどどうしたらいいんだろうって、夜中に長文でメール送ってきたの」

「てか、お前、これって伊達に内緒にしてくれて言われてたんじゃないかたつつけ」

「そうだったな」と言つて大村が笑う。「でもまあ、いずれ伝わる話だし早めに伝えておいた方があいつのために良くね？」

早紀先輩が言った。「ありがとね。教えてくれて」

藤田が言った。「伊達ちゃんに伝えとくわ。新しい彼氏が出来たって」

「いえ、全然そうじゃないんで……」

「これ、内緒にしておいてくれる？」と早紀先輩が言った。

「大丈夫、内緒にしとくから」

「ありがと。オフ会頑張つてね」

「おう、行つてくるわ。じゃ!」

そう言い残して二人は支払いを済ませて出て行った。

伊達先輩がふられたという話。それについて考えていると早



紀先輩は言った。

「心配しなくていいから」

「え？」

「どうせあいつら、今日のこと伊達ちゃんに話すと思うんだ」

「でもさっき先輩に、内緒しておくって言って……」

早紀先輩の表情が険しくなった。「信用出来ると思う？ あ

の二人」

そう言われて僕は黙ってしまった。

「富沢君にだけは迷惑かからないように、伊達ちゃんには伝えるから。だから、気にしないで」

そう言われて、ふとバスの中の会話を思い出した。

バスの中ではあんな話になったけど。

でも、やっぱり二人でいると誤解されるってことなんじゃないのか、と。

海は本当にすぐ近くにあった。

路地を抜けたところに、海沿いに走る道路があった。そこから防波堤になっていて、テトラポッドがその防波堤を越えたところに並んでいる。瀬戸内海だ。向こうにももしかしたら淡路島が見えるかもしれない、と思って見てみるけれど、何も見えない。水平線が澄んだ青空と海の間に見つ直ぐに境界を作っていた。

海自体は濃い緑色。昆布のような、もしくは苔のような色だ。寄せては返す波がテトラポッドや防波堤の壁に砕けて、水の跳ねるささやかな音が聴こえてくる。子供の頃に一度潮干狩りで海に来たことを思い出した。あさりやマテ貝を砂の中から取り出した思い出。

それ以来海に来ることなんて無かった。だから来ようと思えばこんなに近くに海があったのかと驚いてしまった。もちろん姫路市の南端は海に接しているからその気になれば来ることは出来たのだろうけれど。

防波堤沿いに僕と早紀先輩は歩いていった。時間はもう午後にし差し掛かっている。日が高い。僕はハンカチをポケットから取り出してこめかみや首筋の汗を拭いた。早紀先輩は相変わらずツインテールを揺らしながら歩いていく。やっぱり足取りに迷いはなかった。時折通り過ぎていく車が立てる風が少し涼しいような、そんな気がした。

こういう海の光景も小説の材料に入れてもいいのかもしれないな、と思っていた。南国の海といえば透き通った蒼い海なのだろうか。実際に外国に行ったことがないのでこれもまた自分の頭の中で広がる夢想の海だ。砂浜で遊んでいる、破れたシャツとパンツを纏った子供たち。目に眩しいほど白く照り返す砂浜。そこから見えるのはやっぱり水平線だ。港町のイメージも加えてみたい。かたかたと回るエンジン音と、そのエンジンと

波によって揺らぐ船。浜辺にもずっと昔に転覆したまま朽ちている船が黒い木肌を剥き出しのまま転がっている。港から船に乗り、木で出来ている甲板の上に座り込んで酔わないように気を遣いながら、空を見上げる。そこには白い鳥が何羽か飛んでいてその啼き声が聞こえる。頬を撫でる風にはやはり潮の匂いがあるのだろうか。スモッグに汚染されていない空はとても綺麗だ。どこに焦点を結んでいいかわからないぐらい広大な空、聞こえてくる異国語のリズム、ほんの一時の安らぎ。

僕と先輩が着いたのは、防波堤に空けられた隙間から続いていく浜辺だった。現実の浜辺は白というよりはベージュにも似た色だ。少し湿り気を帯びているのか表面が流れることはない。足を踏み入れると確かに土の感触がある。海水浴や潮干狩りといったような大袈裟な行事向きの砂浜とは違う、他の場所はテトラポッドなどで強固に波から陸地を守っているけれど誰かがプライベートな目的のために残しておいてくれたようなそんな砂浜だ。ちょうど真ん中まで来た時点で、先輩は僕の方を振り向いて言った。

「ここが、目的地」

目的といえば……。

「ここで捨てるんですか？」

「そう。伊達ちゃんからこの浜辺でプレゼントしてもらったから」

先輩は指から指輪を取り出して、そして言った。

「この指輪をここに捨てて、それで後は姫路に行つて買物して、それで帰る。付き合わせちゃったお札に、富沢君にも何か買ってあげるよ。何がいい？ 洋服？ それとも……」

「いいんですか、それで」と僕は言った。

「いいんですかって……いいよ。もうこの指輪要らない」

「いや、指輪のこともあるけど、伊達先輩のこととか、それでもいいんですか？ 顔も見たくないって、そのまま別れて」

「急はどうしたの？」

早紀先輩の顔が曇る。僕の中にあつた違和感が少しずつ言葉として始めてきた。

「いいに決まってるでしょ？ あいつ、浮気したんだよ？」

「でも、伊達先輩やつぱり早紀先輩のことが好きだつて分かつたわけじゃないですか」

「一度浮気しておいてよりを戻したいなんて、虫が良すぎると思わない？」

「でも早紀先輩もやつぱりよりを戻したいんじゃないんですか？」

先輩の声のトーンが下がった。「どういう意味？」

僕は切り出した。

「ずっと気になってたんです。今日、先輩制服姿で来ましたよね」

「それがどうかしたの？」と早紀先輩は言った。



「どうして制服姿だったんですか？」

「どうしてって……登校するために決まってるでしょ？」

「早紀先輩は、伊達先輩が朝練でもう学校に行ってること知ってましたね？」

「だから、それがどうかしたの？」

「伊達先輩と会いたくないんだったら、学校自体サボればいじやないですか」

「だから、サボったわけでしょ？ こうして二人でさ——」

「でも、一旦は行く気になった。だから制服を着てきた。朝ごはんも食べた」

「そうよ。それがどうかしたの？ 伊達ちゃんと顔を会わせたくなくても、学校って行かなきゃいけない場所でしょ？ 富沢君って本当に白と黒しか——」

「本当に行きたい気持ちになっていたら、先輩だつてもっと急いでいたはずですよ。朝」

「急いでたよ？」

「急いでなかった。先輩は普通に遅れて歩いて来ました」

「それは、もう遅刻確定だなと思って諦めて——」

「先輩は伊達先輩に会いたくないと言った。でも実は、会いたいとも思っていた。だから、迷った。それで遅れて歩いてきたんじゃないかなと思っただんです。それで、僕を誘ったのだから、自分が伊達さんに未練があるのかどうか確かめようとしてたん

じやないかって」

僕がそう言うと、先輩は黙ってしまった。

僕と先輩の間の距離を近づける。

「その指輪にしたってそうです。僕が先輩の立場だったら、本当に伊達さんが嫌いだったら、その指輪から真っ先に処分します。その指輪をまずオクで売ります」

「あのさあ」と早紀先輩は声を荒げた。「これ、わたしの名前入ってるんだよ？ そんな指輪売れるわけじゃないでしょ？」

「嘘です。さつき表面を見なければ名前なんか入ってないです」

「ちよつとさ——」

「僕は早紀先輩と伊達さんが泥沼の関係になるのは望まないので。でも、もしも早紀先輩に未練があるんだしたら、もう一度自分に正直になつて——」

そこで、衝撃が走った。頬を張られたのだ。

痛みを堪えて先輩の方を見た。先輩はこちらを睨んでいた。

そして、叫んだ。

「分かったようなことを、言うなッ——！」

僕は黙ってしまった。すると、先輩は静かに言った。

「この指輪、名前が彫つてあるの。見てみる？」

そして指輪を僕に手渡した。

「でも表面には何も——」

「裏っ側に彫ってあるの——！ 見てみなさい——！」

手渡された指輪を見た時、僕は自分が途方もない思い違いをしていたことに気付かされた。確かに名前は彫られていた。

SAKIと、四文字——。

「……すみません」

「こんなの……常識だよ？ そんなのも分かんない奴が偉そうに説教かよ——！」

先輩の声のトーンが変わった。よく見ると先輩は泣いていた。

「ちよっと、付き合いなさい」

そうして、入って来た方向に再び足を戻す、砂浜から出る気だ。

「あの、一体どこに……」

「黙って付いて来なさい——！ 先輩命令——！」

そう言われて、僕は改めて胸が痛くなった。

自分はやってはいけないことをやってしまったのだ、と——。

先輩が行った先は酒屋だった。自動販売機に闇雲に札束と小銭を入れて、そして発泡酒を取り出す。もちろん二人とも未成年だし、先輩のやっていることは無謀だった。でも、それに就いては何も言えなかった。

500mlの缶を両手に抱えて、先輩は再び浜辺に戻った。そし

て、僕の方に缶を一つ押し付けてそして言った。

「飲みなさい」

「いや、でも……」

「先輩命令」

「分かりました」

そう言っただけを開ける。発泡酒なんて普段は飲まないからどんな味がするのかと思って、開いた口から少し舐めてみたけれど、舌を痺らせるぐらい冷たくて苦い味が口の中に広がった。思わず顔を顰める。

先輩は慣れた手つきで缶を開け、そこから一気に呷る。発泡酒を飲むのはこれが初めてではないのだろう。もしかしたら伊達先輩と一緒に飲んだのかもしれない。いや、伊達先輩はそういうことを許すようなことはないだろう。不祥事ということもあるだろうけれど、お互いの体を心配して……そこまで考え込んでいた時、先輩は短パンのポケットから煙草とライターを取り出して、それを吸い始めた。豹変した先輩の冷淡な表情は朝に出会った時よりも遥かに大人びていた。これなら未成年だつてバレることもないのかもしれない。

「ほんと言うとね」と早紀先輩は静かに言った。「待合所に来る話までは正解」

「え？」

「富沢君の言ったこと」



そう言つて先輩は、深々と吸い込んだ煙を吐き出した。

「あいつに会うのも気まずいけど、会わないと伊達ちゃん、わたしに対して逆に気を遣うんじゃないかなって思つて。で、一応家は出てみたけどどうしようかなって迷つて、そこで富沢君を見て、誘つた。ここまででは正解」

僕は黙つて発泡酒を一口飲んだ。やっぱり飲み慣れない苦味が口の中に広がる。ただ、嚔下した分は食道と胃壁を焼いたように熱く身体の中に入つていく。心なしか、頭が重くなつてきたように感じられた。

「でも、富沢君を誘つたのは別に理由なんてないのよ。ただ伊達ちゃんから富沢君のこと色々聞いて、何か面白そうな子だから一緒に遊びに行きたいなつて思つた。それだけ」

そこで僕の方は怒るべきだったのかもしれない。でも、そんな気にはなれなかつた。暴言を吐いてしまったこともあつたけれど、結局先輩と過ごした時間は楽しかつたから。

それに、パスタも美味しかつたから。

不意に先輩が立ち上がった。

「ちょっと、トイレ行つてくる」

そうして僕は残された。先輩は既に二つ目の缶を空っぽにしていた。僕も最初の缶を空にして、手で握りつぶす。そうして先輩の飲んだ缶も同じように潰そうと拾い上げてみたら、うっすらと口紅がついていた。あるいは目の錯覚でそう見えたのか

もしれない。

先輩が戻つてこないのを確かめて、僕はその口紅の痕に自分の口紅を重ねた。

相変わらず慣れることが出来ない発泡酒特有の苦味を確かめながら――。

眠りかけている先輩を、軽く頬を叩いて起こす。エンジン音が止むことはない。

「先輩、起きて下さい。終点です」

運転手が迷惑だという表情で、鏡越しにこちらを見ている。先輩は軽い唸り声をあげて、そのまま体を振る。しかしやがて目を覚まして、そして立ち上がった。そして財布を探して、そこから運賃を出してくれた。その運賃を僕は運転手に渡した。

「子供がいつちよ前に酒なんか飲んだらいかな」と運転手は言つた。その言葉に追いつられるように、僕は待合所のベンチまで移動した。バスは再びロータリーまで移動する。やや呂律が回らない舌で早紀先輩は言つた。

「富沢君つて結構お酒強いんだね」

「そうなのかな」と僕は言つた。「飲んだことなかつたんで分かんないです」

姫路の街まで移動した時はかなり千鳥足だったのだけど、それと比べると酔いは少し醒めたようだ。じつとりと汗ばんだT

シャツから漂ってくるのは汗の匂い、そしてそのTシャツに零してしまった発泡酒特有の甘い匂いだった。僕の方も汗ばんでいたの、ポケットから改めてハンカチを取り出して汗を拭った。

「わたしが飲めなかった分まで飲んでくれたじゃない」

「え？ そうだったんですか？」

そう言うと、先輩は呆れたように言った。

「富沢君って、本当に自分のことが分かってないね」

何気ない言葉なんだろう、と思った。でも、その言葉は今でも心に残っている。

先輩はまだ足がふらついて自転車に乗れない状態だったので、二人で自分の自転車を押しながら先輩の家まで歩いていった。先輩が言った。

「ありがとうね」

「いえこちらこそ。御馳走までしてもらってありがとうございます。良かったです。あの Pasta、美味しかったです」

それに応えて微笑む先輩の顔は、いつもの顔に戻っていた。

先輩の姿が消えた後、僕はメモ帳を近所のコンビニのゴミ箱に捨てた。

帰宅した僕はその日両親に厳しく説教されたのだけど、それ

はまた別の話だ。

僕はそれ以来しばらく、小説を書くのを止めた。

早紀先輩と伊達先輩はその後よりを戻したようだけど、卒業後の進路は別々になってしまった。今ではどうなっているのか分からない。

今でも帰省すると、時間がある時僕はバスに乗ってあの町で降りて、あの店で Pasta を食べることがある。僕は変わっていくが Pasta の味は相変わらず美味しいことにいつも驚かされながら変わるものもあれば変わらないものもある。

了

